

Aichi
Puppetry
Center

あぶ

ひまわりホールから
発信する
シアター情報誌

アマチュア精神 バクステツ!



人形劇団わたくも30周年記念公演
(人形美術: たかはしいちげん、田中信幸)

REPORT

ネビル・トランターによる ワークショップ

~Power of Puppet-人形のパワー~



2016年2月3日・4日、損保ジャパン日本興亜人形劇場ひまわりホールにて開催

Nevill Tranter

世界の人形劇界をけん引する“Stuffed Puppets Theater”の設立者で、オランダを拠点に世界中で活躍する人形劇人ネビル・トランター氏のワークショップが、文化庁、日本児童・青少年演劇劇団共同組合の主催で2日間にわたり開催されました。参加対象者は愛知を中心に長野、大阪、なんと北海道からの参加もあり、計15名の人形劇人が集まりました。

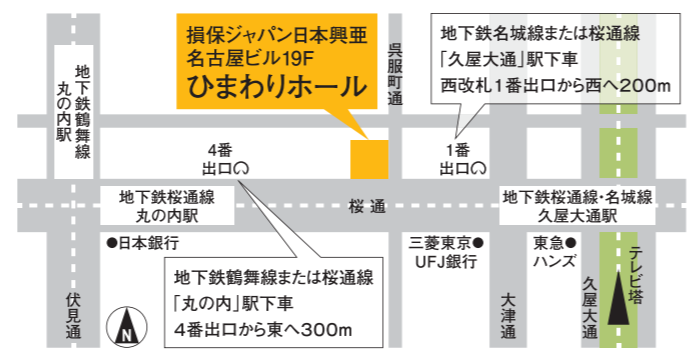


ネビル氏の相棒(もはやそのように見える)「ジーノ」というロバク人形を、ネビル氏が動かして見せる。それは感情を入れない、ただの動かすという「作業」。だが、なぜかジーノが生きて見える。その秘密は何なのか…。まずは人形美術だ。ジーノの目は、右目は目頭が下がり、左目は目じりが下がっている。この左右非対称のアイロニックな表情が観る者に何かを想像させるのだ。そしてこの「目」の動きが、人形が生きているように見える「マジック」の一つだという。まず、人は動くものを眼で追う。そして観客は人形の「目」を見ている。人形が動くときにはまず「目」から動くことにより、観客が人形の「目」を追うようになる。これが観客を人形に集中させるための方法なのだ。このようにネビル氏のワークショップはまさに理論。ネビル氏が与える課題「感情を入れない技術的な動き」を参加者が一人ずつジーノを遣って実践してみる

のだが、ついつい「演じて」しまう。経験則だけで人形劇を続けてきた私たちは、遣い手がそう思えば人形はそのように動く、と無意味に信じてきた。これが正解だと何となく感じていたことを理論的に説明し、その訓練方法までも的確に示すネビル氏。参加者はまさに「目からウロコ」状態。更にネビル氏が重要だと言うのは「身体言語」だ。ジーノが斜め45度下を見てじっとしている、そしてゆっくりと顔を上げる…。たったこれだけのことで、観客はどれだけの情報を受け取ることができるだろうか。悲しみから立ち直る姿、忘れていたことを思い出す姿、突然の音に反応する姿…。それはすべて体の状態が発信する「身体言語」。そして「身体言語」による観客とのコミュニケーションで最も重要なことは「静止」。動いたら止まる、ということは人形を扱いたれた役者なら理解していることだが、ジーノでの実践で誰もが口にしたのが「こんなに止まっていて大丈夫なのか不安になる」ということだ。しかしネビル氏からのエチュード課題をこなしていくうちに、観ている方に情報が整理されて伝わってくるようになり、人形ならではのおかしさがにじみでてくる。

ワークショップは、難しい課題になるほど、笑いが絶えないものとなりました。

愛知人形劇センター理事 弓達聡子



特定非営利活動法人
愛知人形劇センター
〒460-8551 名古屋市中区丸の内3-22-21
損保ジャパン日本興亜名古屋ビル8F
TEL&FAX 052-212-7229
http://aichi-puppet.net/ MAIL:mail@aichi-puppet.net

愛知人形劇センター
ひまわりホール情報誌
あぶ
Aichi Puppetry Center
愛知人形劇センター
〒460-8551 名古屋市中区丸の内3-22-21
TEL&FAX 052-212-7229
http://aichi-puppet.net/ MAIL:mail@aichi-puppet.net
発行: 特定非営利活動法人 愛知人形劇センター
発行人: 木村繁
編集人: たかはしいちげん
デザイン: 江利山浩二 (KINGS ROAD)
編集: 小島祐未子 (常嶋の編集舎)
©愛知人形劇センター ※本誌記事・写真・レイアウトの転載を禁じます。

座談会「劇作家とつくる人形劇2016」



ほりえよしひろ 堀江善弘
afterimage所属。ユニークなアイデアと豊富な運動量でダンサーのみならず振付家・俳優・イベントオーガナイザー・舞台監督としても国内外で活躍。2010年、「自分×人・音・空間=?」を生み出すため【exit】を立ち上げ、意欲的に活動中。

かわむらみちる 川村ミチル
演出家・俳優。劇団そののゆめ主宰。俳優のほか、地域コミュニティの演劇講座や表現教育授業、保育士・教員向け現職教育、育脳塾の講師など務める。児童青少年演劇のほか市民劇制作も多数。2006年度全国児童青少年演劇協議会奨励賞受賞。

ふなはしいちげん 舟橋“委員長”慶子
劇作家・演出家。シアターUNA(ウナ)主宰。高校演劇を経た後、学生劇団を視察3昧。2011年、ソロユニット「シアターUNA」を始動。会社員として働きながら作・演出を担当する(たまに出演も)。「美しさ」「女」をテーマにした物語性の強い作風が持ち味。

からまかおす 刈馬カオス
劇作家・演出家。刈馬演劇設計社代表。『クラッシュ・ワルツ』で第19回劇作家協会新人戯曲賞・名古屋市民芸術祭2015芸術祭賞(大賞)。「誰も死なない」で名古屋市民芸術祭2014特別賞。愛知淑徳大学非常勤講師。名古屋外国語大学非常勤講師。

劇作家と共に贈る短編人形劇企画第2弾。新作を書き下ろし演出も手掛ける刈馬カオス、堀江善弘、作・演出でタッグを組む舟橋“委員長”慶子と川村ミチルの各氏に話を聞きました。

——人形劇やドール、フィギュアとの出会いは?

川村 祖母からお土産にもらった。いろんな人形をベッドに並べてごっこ遊びに興じていた。ストーリーはだいたい悪い魔女につかまってひどいめに遭う話。ゴーヤスなドレスの人形もラクダもマトリョーシカも、こけしも一堂に会して。

舟橋 人形ってどんな洋服もメイクも髪型も似合う! 体型とか年齢の悩みもないし(笑)、私にとってドールとは「憧れ」を仮託した存在です。だから、ひとがたの容姿をしているものにより惹かれますね、球体関節人形とか。ストーリーのためのキャラクターというより、人形は私の「アイドル」、美しい偶像です。

堀江 ここ数年で発覚したんですが、叔父が長年人形劇をやっていて、幼少期に何度も観ていたようなんです。記憶にはあまりないのですが、その影響か人形遊びはよくしていたようです。サンダーバードや、ひょうたん島も!

——ヒトはなぜ、モノや人形を使って表現すると思いますか?

刈馬 演劇は様々な制約の上で成り立っています。お金や劇場の機構や俳優の数…、その1つに「人間の身体能力の限界」もある。身長より何倍も高いジャンプをしてほしいリクエストしても、それに応えられる役者はいません。舞台から一瞬でハケさせることも不可能でしょう。しかし人形なら…! 人形劇では制約のいくつかが消滅し、新たな楽しみが生まれる予感があります。

舟橋 人間が演じると「こんなクールな役をやっているけれど、本当はよく喋る面白いやつなのにな」とか、どうしても役者がつきまといまわります。あくまで誰かが演じるハムレットとかになる。モノで表現すると観客が個々に感情移入しやすいのかも。人形やモノが「心」をいれる「器」になるのかもしれない。

堀江 ある種、表現を増幅する小道具や手法なのかな? モノを人間に「見立てる」ということは、それ自体がもの凄いのフィクションです。人間が演じることの嘘と真実の距離が、人形に置き換えて「見立てる」ことで受け入れられるように感じるんですね。特にアニメや、ファンタジー性の強いもの程、人間がやることへのリアリズムの差がありますから。

——今回どんな人形劇を作った?

刈馬 平田オリザ氏とロボット工学の世界的権威である石黒浩大阪大学教授によるプロジェクトでは、アンドロイドと俳優が共演する作品を創作しました。それを観ると、私たちは俳優よりもロボットに親近感を覚える瞬間があったり、機械の中を温かい血が流れているように感じるがありました。それは人間そっくりだからではありません。私たちは、ただのペットボトルでも物語の登場人物として観ていくうちに生々しいものを感じることができる。それが人間の想像力であり、物語の力です。そういったところを念頭に創作したいと考えています。

堀江 僕は振付家・ダンサーとして、今までに無かった「身体性に特化した」モノに仕上げたいですね。人形を人形としてのみ扱うのではなく、既存の定義に囚われないやり方を模索しています。

舟橋 去年、川村さんと作った「人魚姫」のお芝居を人形劇に仕立て直します。私は初めての人形劇で、ミチルさんからは「人形はもっとイメージが飛べるから面白いもの書いてね」とハッパをかけていただきました!

川村 大人のメルヘン、ドキドキするようなものにしたいですね。楽しみー!

聞き手: 愛知人形劇センター理事長 木村繁

劇作家とつくる人形劇2016
6月25日(土) 14:00/19:00・26日(日) 14:00
前売2100円 当日2400円